



Title	亡命者エリアーデの思想におけるエリアーデ宗教学
Author(s)	奥山, 史亮
Citation	基督教学, 46, 28-31
Issue Date	2011-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47485
Type	journal article
File Information	SC46_002.pdf



亡命者エリアーデの思想に おけるエリアーデ宗教学

奥山 史 亮

本発表は、エリアーデ宗教学の主要概念をルーマニア人亡命者組織における彼の言論活動と照らし合わせることによって再考するものである。特に、ルーマニア人亡命者たちが偏狭な民族主義に陥ることを戒める批判的概念として「宇宙的キリスト教」というエリアーデ宗教学の主要概念が提示されていることに着目する。そのことにより、ルーマニア人亡命者組織に参加していた人間を読み手として想定した場合に可能となるエリアーデ宗教学の新たな見方を提示することが本発表の目的である。

エリアーデは一九四五年にパリへ亡命すると直ちに、ニコラエ・ラデスク將軍の参謀役であったブルトウス・コステラと協力することで、ルーマニア人亡命者組織の

設立と運営に尽力した。その亡命者組織の機関誌の一つで、エリアーデが編集主幹を務め、ラデスク將軍の資金によってパリで刊行された『明星』の創刊号にはエリアーデによる「序文」が掲載された。そこには、異国に身を置いているルーマニア人亡命者は祖国に残された同胞たちに代わって社会主義政權に抗する文化活動を展開しなければならないという組織の理念が明記されている。ルーマニア人亡命者に文化的連帯を呼び掛ける同様の主張は、一九五〇年に『ルーマニア同盟』に掲載された「絶望に抗して」においても確認できる。「絶望に抗して」は、社会主義政權から逃れて西欧に亡命してきたがルーマニア人亡命者同士の政治的対立を目的にしている。エリアーデは、ルーマニア人亡命者同士の政治的対立から逃れるために極東へ向けて再び旅立ちたいという手紙がある若者から受け取った。エリアーデは、自由を求めて亡命してきたルーマニア人が先に亡命していた同胞たちの政治的対立をみて幻滅する事例が増えていることを事実と認めながら、「深刻かつ重大であるのは、

懐疑や不信、恨みといった雰囲気が次第に亡命者全体に広がりつつあるという事実である。我々各々の義務は、我々の魂の統一性 (*unității noastre sufletești*) を脅かす雰囲気に対して闘いを挑むことなのである」と述べて、ルーマニア民族の精神的統一を防衛するための文化的闘争を展開することが不可欠だと述べている。これらの資料からは、ルーマニアの民族精神を意識のうちに見出すことによって、ルーマニア文化の存続をかけた運動を展開することが亡命者にとっての最重要の課題であるというエリアーデの信条が確認できる。しかしながらエリアーデによるこれらの主張は、自民族やその文化の存続のみを目的とするものであり、過激な民族主義運動を助長する危険性を有していると解釈することも可能である。いずれにしても、これらの論説から読み取れるエリアーデの思想は、様々な時代や地域の文化に目を配り、それらの根源に存在する普遍的な「宗教」を提示しようとした宗教学者エリアーデの思想とは相容れないものに見える。

しかしエリアーデは、亡命者の共同体が偏狭な民族主義に陥ることの危険性を様々な論説において指摘するこ

とも行なっていた。一九五二年に、ルーマニア人亡命者組織の機関誌『論壇』に「ヨーロッパと鉄のカーテン」と題するエリアーデの論説が掲載された。「強大な文化の地方的偏狭主義ほどに不快なものは存在しない」という書き出しで始まる本論説において、エリアーデはヨーロッパ文化の重層性を主題化した。すなわちヨーロッパの文化は、様々な地域文化の衝突と融合によって、さらに、ロシアやビザンツ、西アジアから東欧を経由してもたらされた文化や経済を受容することによって形成されてきた。またヨーロッパにおける諸民族は、外界からもたらされた事物をただ受容するだけではなく、そこに自分たちの文化要素を加えることによって新たな文化形態を創造してきたとエリアーデは主張する。エリアーデによれば、このような文化的展開において中心的な役割を果たしたものがキリスト教であった。すなわち、キリスト教は様々な民間の宗教文化を吸収し統合することで、地域間の文化の融合を促進してきたとエリアーデは述べる。

このような議論を展開した後、エリアーデは、現在のヨーロッパを東西に分断している鉄のカーテンの問題へと

論を展開する。エリアーデによれば、鉄のカーテンは今日の政治的状况に基づく政治的産物にすぎず、ヨーロッパ文化の重層性・相互連帯性を断ち切れるものではない。そしてエリアーデは、キリスト教が古来より形成してきたヨーロッパ文化の重層性を強調することにより、ヨーロッパに生きる人間が冷戦の政治イデオロギーに翻弄されて安易に政治的対立に参加することを戒め、政治的諸問題を超える文化的統一性へと目を向ける必要を訴えている。

周知のように、「ヨーロッパと鉄のカーテン」で主題化されたキリスト教の文化統合機能は、エリアーデの宗教理論においては「宇宙的キリスト教」と呼ばれている。宇宙的キリスト教は、異なる信仰体系同士が習合することによって独創的で新たな宗教現象が創造されるという文化的展開、また、そのようにして生み出された文化は古来の信仰体系を内包する重層的なものである故に単一の文化形態へは還元できないという文化的側面を論じる際に主題化される。宗教の習合に関するこの議論は、聖なるものは歴史的動向を超えて存続するという議論と結びつく故に、エリアーデ宗教学を読み解く上で重要な主

題となる。しかし本発表においては、習合や宇宙的キリスト教に関するこの議論をより詳細に論じることは目的とせずに、ルーマニア人亡命者組織でのエリアーデの思想活動との関連において解釈したい。

前述したように、エリアーデはルーマニア人亡命者組織の機関誌において、鉄のカーテンがもたらす政治的分断を乗り越える手段を示すものとして、宗教間の習合という現象に着目した。すなわち、キリスト教と民間宗教との度重なる習合はヨーロッパの文化が根底で結びついていることの証であり、その文化的重層性は鉄のカーテンなどの政治イデオロギーによって分断できるものではないとエリアーデは主張していたのであった。「ヨーロッパと鉄のカーテン」におけるエリアーデのこのような政治的見解を知っていたルーマニア人亡命者にとっては、『世界宗教史』における「宇宙的キリスト教」の概念は、歴史がもたらす政治的分断を乗り越えて重層的な文化の創造に参加することを呼びかける政治的理念として解釈されたことが予測される。

エリアーデは、一九四〇年にルーマニアを後にしてか

らは祖国に戻ることなく死去した。その間、ルーマニアは第二次世界大戦での敗戦を経て社会主義政權に統治されるようになり、エリアーデが生まれ育った社会環境は根底から覆されるにいたった。家族や友人、かつての恋人をこのような混乱の渦中にある祖国に残してきたという事実は、エリアーデの心に重くのしかかり、祖国に対する罪責意識を生じさせたと考えられる。

もちろん「宇宙的キリスト教」に関するエリアーデの見解は純学問的に示されたものであり、その学説としての評価は「宗教学者エリアーデ」の妥当性を議論する過程で為されるべきであろう。しかしルーマニア人亡命者であるエリアーデが、自身の言葉の受け取り手として、他のルーマニア人亡命者や祖国の同胞を全く想定していなかったとは考えにくい。亡命者としての側面に着目してエリアーデの言葉を解釈していく作業は、近代国家の国民であるというアイデンティティを喪失した人間や愛する人間との絆を断たれた人間にとって、宗教学者が提示する「宗教」は如何なる役割を担い得たのかという問題を考察することに資するであろう。

ドイツの宗教科における 他宗派・他宗教の位置づけ

石川 智子

第二次世界大戦後に公立学校での宗教教育が憲法で禁じられた日本とは異なり、宗教教育が憲法によって義務づけられているドイツでは、学校は、社会における宗教的コミュニケーションを考える上で、今なお重要な場と考えることができる。一方で日常生活の全般において教会との結びつきが薄れ、他方では生活スタイルの多様化が進むなかで、現代社会における学校は、多くの人が宗教に関わる情報と体験を共有する場としても機能しており、そこにそれぞれの社会における宗教的現実のひとつの縮図をみることができる。なお本研究での分析が目指すのは、宗教教育という切り口からドイツ社会における宗教的現実の継承と再生産を理解すること